

中国・四川大地震パンダプロジェクト

2008年5月12日、中国・四川省をM8級の地震が襲いました。死者・行方不明者8万人以上、数百万人が避難生活を続ける大災害に対し、私たちは「忘れない、思いをはせる、気持ちを届ける」を合言葉に日本からの支援策を探ってきました。そこで生まれたのが「パンダタオル」です。見た目はかわいくとも、被災地と私たちをつなぐメッセンジャー。当通信は、パンダタオルをめぐる活動や被災地の状況をお伝えしながら、復興支援への協力を呼びかけます。

～被災地は今～

V-MAX 箕輪さんのレポート・その1

今回は、RSYと関係が深い「V-MAX」番組ディレクター箕輪幸徳さんからシリーズで報告をしていただきます。まず、箕輪さんとRSYの関わりについて、箕輪さんをご紹介する形でお話します。

昨年6月に北京に住む女性ジャーナリストが、都江堰などの取材をされ、番組ディレクター箕輪さんが日本で編集をし、静岡のケーブルテレビで中国四川大地震についての現状をオンエアされました。

またRSYでは、昨年11月にRSY事務局関口が、静岡県ボランティア協会と、CODE海外災害援助市民センターの活動にご一緒させて頂く形で、四川省へパンダタオルを約60個届けました。

箕輪幸徳さんは、中国四川省の現状を自分自身で取材をしたいという思いがあったそうです。また静岡県ボランティア協会からRSYのパンダタオルプロジェクトの活動を聞き、関心を持っていただきました。そして今年の4月に、11月の訪問時にRSYがパンダタオルを渡した方々のその後の暮らしを追跡取材されました。その後中国四川省の現状と、パンダタオルを追った『大陸を渡ったパンダ』、30分番組を制作してくださいました。

そんな箕輪さんから、パンダタオルの追跡取材について、そして、箕輪さんから見たRSYの活動についての感想などを含め、お伝えしていただきます。

～大陸に渡ったパンダ～



— 『大陸に渡ったパンダ』作成前夜—

その日私は、地元でのロケを終えクルーと食事をしていた。そこへ大阪に住む友人から電話があった。

「箕輪さん！今どこにいますか？」

慌てた様子に少し驚いた。

「え？静岡だけど・・・どうした？」

「中国に行くって聞いたから・・・」

2008年5月12日、四川大地震当日のことであった。

私はその年の5月4日から5月10日まで仕事で北京に滞在していた。当初の予定では四川省の成都まで足を伸ばしパンダ基地も取材する予定だったのだが、移動時間が惜しくて北京滞在型の取材に切り替えたのであった。

私の帰国後に、取材に協力してくれた北京の友人夫妻が二人で四川取材をする予定だった。

今度は私が慌てた。その夜の遅くに帰宅したのち、北京に電話し二人の安否を確認した。

「1976年以来の中国激動の年」と彼は言った。死者24万人以上を出した唐山地震があり、文化革命が終わったその年ほどに中国は大きく揺れ動いているという。

そのひと月後には北京の女性ジャーナリストが現地に入り取材したテープを受け取り、私が構成して番組にした。

そんな経緯の中で私は四川の被災地をこの手で取材し日本に伝えたいという思いが募っていった。

そしてこの3月、昨年行きそびれたパンダ基地を取材しようと北京の友人と企画していた時にパンダタオルプロジェクトの話を知った。四川省の象徴でもあるパンダが日本から四川にわたり被災地の人たちを癒しているという。メールに添付された一連の写真の中にはパンダのぬいぐるみを持つ笑顔の子供たち、そして「震」と名付けられた地震当日生まれのこどももいる。

この話にとっても興味を感じた私は、早速企画書を書きRSYへの取材を申し込んだ。

RSYの人たちの熱い思いを伺ったのち、いくつかのパンダタオルをあずかり、私はまず北京へ向かい友人夫妻、AさんとBさんの二人と合流した。



「漢旺」

— 四川にて取材開始 —

四川省の成都空港に降りた私たちは、世界中から集まったボランティアたちの基地ともいえるシムズコーギーガーデンホテルに向かった。



マレーシア人のご主人とこの宿を運営する 植田麻紀さんに話を伺った。

麻紀さんはパンダタオルを見せてくれた。かなり使い込

んである。「ぬいぐるみとしても実用品としても使えるのがいい。子供達も気に入っています。」

幸先のいい出だしだと思っていたが、その後予定していた車のチャーターが出来ず、取材地を減らしてバスとタクシーを使っての移動になった。ドライバーが取材に同行して公安に拘束されるのを恐れたためだ。私たちは旅行者の装いにカメラも民生機に見える小さなもの1台。しかし「これも中国の現実」という言葉が、甘い考えだった私の心に深く突き刺さった。



「都江堰市街地」

成都から都江堰のバスターミナルまでは約1時間。観光地の都江堰市はさすがに復興が早いだろうと思っていた。手元には昨年6月の映像もある。比較しやすいだろうと取材地候補に入れていた。

バスがターミナルに着く前に予想は外れた。壊れたビルが当たり前のように残っている。少し路地を入れれば既にゴーストタウンの様相を呈している。あの日から1年が経とうとしているのが嘘のようだ。

そして翌日、麻紀さんに棚花村のスーチーさんを紹介してもらい、現地へ赴く。棚花村は震君が住む村で、スーチーさんのご近所との事。

綿竹のバスターミナルまでは約2時間。更にタクシーで村までは1時間弱。

道の両側にはこれからの建設に使うのであろうレンガが堆く積み上げられていた。

私たちは無事にスーチーさんと会い、辛い話も含めて沢山の話を聞くことが出来た。

(文・写真=V-MAX ディレクター・箕輪幸徳)

パンダタオルが心をつなぐ！

☺パンダタオルの輪☺ ☆思いよ、届け☆ [かわいいパンダ達 現在 724個 完成!]

日付	内容	場所／主催
5月22日	RSYボランティアデー／パンダタオル手づくり教室	RSY事務所／RSY
6月 6日・17日		



5月22日 RSY 事務所でボランティアデーが行われました。この日はボランティアデー初めて！という方、いつも来てくださる方、そして桑名市立陽和中学校の生徒6名が、学習の一環として RSY 事務所に来てくださいました。事務局スタッフ藤田が RSY について、パンダタオルプロジェクトについての経緯についての説明をした後、ボランティアリーダーさんによりパンダタオルづくりを行いました。みなさん慣れない手つきでしたが、ボランティアリーダーさんの指導のもと、一生懸命パンダタオルを作ってくださいました。数日後、桑名市陽和中学校の生徒さん6名からすてきなお手紙が届きました。素直な気持ちの感想がすごく心に響きました。ありがとうございました。

指を何回も刺してしまった生徒さんも、、

桑名市陽和中学校の生徒さんの感想

- ・心に残っているのは、みなさんに教えて頂いたパンダタオルを作ったことです。中国・四川の子ども達が少しでも元気になってくれればいいなと思います。
- ・パンダタオルを中国の人達のために作っている事が感動的でした。自分も人のためにそういうことをしたいと思いました。



生徒さんのお手紙は、紙いっぱい！

4月27日、JAL のスタッフのみなさんにパンダタオル手づくり教室を行った後、当日来られなかったスタッフのみなさん、もう一度作りたと言ってくれたみなさんが、レシピをもとにパンダタオルを作ってくださいました。RSY にかわいいパンダタオルが送られてきました！ご協力ありがとうございました。

【まめまめ四川】⑥中国四川省はパンダの故郷

四川省といえば何といてもパンダです。中国の 85% 以上のパンダは四川省にあるので、「パンダの故郷」の美称を持っています。パンダを漢字で書くと「熊 猫」、中国語では[xiongmao]と発音します。パンダは元来肉食動物ですが、現在は草食動物に変化しました。成年パンダの体重は 100 キロぐらい、身長は 150 センチぐらいで、一日 10～15 キロの竹を食しています。パンダの平均寿命は 15 年前後で、その数は 1000 頭もないと言われています。単独 行動を好むパンダは性格がちょっと神経質なところがあり、中国の公園ではパンダの住まいに防音措置を設置しています。(柚原)



事務局より

● 作り手さん大募集!!

RSYボランティアDAYにて「パンダ作り教室」を開催!

7月 3日(金) 19:00～21:00

7月 11日(土) 13:30～15:30

7月 29日(水) 10:30～12:30

※ 参加自由。パンダキット1セット100円で販売します。

場所: NPO 法人レスキューストックヤード事務所
(地下鉄東山線「本山駅」下車2番出口から徒歩2分)

● 「パンダ教室」をイベントによんでください!

四川大地震写真パネルの貸し出しやパンダづくり講師を派遣します。

(パネル貸出無料。講師交通費はご負担下さい)

● パンダタオルプロジェクト募金にご協力下さい。

パンダタオルを作成・送付するためには必要経費として材料費や郵送料等が必要です。活動資金のご協力をお願いします。

[お振込み先] 郵便振替: 00800-3-126026

加入者: 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

※通信欄に「中国四川大震災支援」と明記してください